

コミュニティにおける 「関心」と「時間」についての考察

杉原 学
SUGIHARA Manabu

1. はじめに

東日本大震災以降、「絆」や「つながり」の必要性が強く叫ばれるようになったが、このような問題意識の存在自体はもちろん今にはじまったものではない。

近代社会は、「個々人は非常にばらばらな孤立したものになっている」(パッペンハイム 1977: 96、原著初版 1959 年) ことを特徴とし、それは伝統的な共同体の解体とともに形成されていった。人々はそこに「自由な個人」がつくる「幸福な市民社会」の構築を夢見たが、その理想は行き詰まり、さまざまな問題を噴出させている。

日本における自殺の問題もそのひとつである。多くの自殺の背景にはうつ病の存在があることはよく知られているが、筆者が修士論文⁽¹⁾の中で明らかにしたように、さらにその背景には、共同体を失った人々の「存在することの肯定感の喪失」がある。それは、フランクルの言葉を借りれば、「一つの存在者は他の存在者と関係づけられることによってはじめて、両者は本質的に存在しうる」(フランクル 2011: 25) ことと深く結びついている。

そのような中で、「人のつながりの再構築」の必要性がさまざまな場面で指摘されているが、その多くは横のつながり(現在の空間軸のつながり)についての議論である。近代化の進展にともない、横のつながりと同様に解体されていった縦のつながり(歴史的な時間軸のつながり)については、ほとんどふれられていないのが現状である。

コミュニティ(共同体)の源泉は「関心」であるとしたのはマッキーヴァーであったが、彼による「コミュニティ」と「アソシエーション」の分類は、今日の社会デザインを考える上でも有用な視点を提供している。そこで、彼が用いた「関心」の意味について検討し、それを時間軸から分析することで、「関心」と「時間」の関係、さらには近代化とコミュニティ解体のプロセスについて考察したい。

2. 『コミュニティ』における「関心」について

マッキーヴァーのコミュニティ研究は、ひとつの「関心論」として展開している。彼は主著『コミュニティ』(原著初版 1917 年)の中で、「人間の諸関心はすべての社会

活動の源泉であり、その関心の変化は社会進化全体の源泉であると思われる」(2011：127)とし、関心を人間社会の根っこの部分に位置づけている。また、「人々がコミュニティを創り出すのは、相互に意志して関係を取り結ぶとき」であるが、それも「関心の故であり、関心のためなのである」という(2011：124)。

彼はこの関心という要素を用いて、「コミュニティ」と「アソシエーション」という分類を提示した。コミュニティとは、共同関心⁽²⁾を源泉とする共同生活の一定領域であり、アソシエーションとは、特定の関心を追求するための組織体である。アソシエーションは、コミュニティの中に複数の器官として存在する(マッキーヴァー 2011)。

さて、ここでマッキーヴァーが用いる関心(interest)について考察しておきたい。

マッキーヴァーは、「社会生活の大部分は、……慎重に熟慮した意図の範囲内に入っている」(2011：127)とし、関心の意識的側面を重視した。それは、「目的に対する手段の適用を意識的に行う」ときにみられるような、「より明瞭な関心」(2011：126)であり、一般的に「利害関心」というニュアンスでとらえられる。「関心には常に必ず選択が存在する」(2011：338)ことから、直観というよりは知性の領域に属するものと言えるだろう。

一方で翻訳者の中久郎は、「関心」という訳語をあてた経緯について、『コミュニティ』の訳者付論の中で次のように述べている。

〈関心〉は interest の訳語としての含意を必ずしも適切に表現し得ないうらみがある。そのため、これまで、利害関心のほか関益、利嗜などの造語を当てる試みがあったが、本訳書では、やはり普通の用法にしたがって〈関心〉の訳語を用い、文脈により適宜〈利害〉の語を当てた(2011：482)

このように、マッキーヴァーの用いる interest は、文脈により含意が異なるとみられ、これを正確にとらえることは難しい。しかし先述したように、彼が「関心」を客観的で明瞭な概念として用いたかったことは間違いのないであろう。

確かに、特定の関心を追求する組織体であるアソシエーションについては、その形成において、客観的で明瞭な「利害関心」が必要条件となることは理解しやすい。では、共同関心を源泉とするコミュニティにおいてはどうか。マッキーヴァーは、「コミュニティはたえず相互に関係し合う心の活動によって創られる」(2011：123)と述べている。こうした関係の中で生まれる成員相互の関心においては、明瞭な「利害」を超越するものが少なからず含まれるはずである。これを「利害関心」のような「明瞭な関心」としてのみ解釈してしまうことには無理が感じられる。

そのことを裏づけるように、マッキーヴァーは後年、コミュニティ成立の条件として「コミュニティ感情 (community sentiment)」の必要性を新たに追加している。この感情から検出されるのは、「われわれ意識 (we-feeling)」、「役割意識 (role-feeling)」、「依存意識 (dependency-feeling)」の三要素であるという(マッキーヴァー、C・H・ページ 1973) (表1)。

マッキーヴァーは、コミュニティ感情を「地域構成員の共同利害関心をかきたてるもの」(マッキーヴァー、C・H・ページ 1973)としているが、同時に共同利害関心の

複雑性についても言及している。彼によると、「共通の利害関心には、広範な、ないしは包括的という特徴がある。というのは、それは特定の対象に結びつくのではなく、日常生活の全体的な背景——場所や共同生活者——に結びついているからである」。それは自分だけの利害関心にも結びついているが、「しかしながら共通の利害関心がひろがれば、そのかぎりにおいて、場所や集団からなる複合統一¹体への愛着があらわれてくる」(マッキーヴァー、C・H・ページ 1973)。こうした愛着の前では、コミュニティは個人の利害を超えて守るべき世界として存在する。

このようなコミュニティ感情から、欧米のコミュニティと日本の伝統的なコミュニティとの一般的な違いについて述べることもできるであろう。よく指摘されるように、

表1 コミュニティ感情の三要素

われわれ意識	分割不可能な統一 ¹ 体とともに参加しているという共有 (communion) の感覚である。他者との同一化を導くのがこの意識であり、したがって「われわれ」という言葉には自他を区別する意識はなく、「われわれのもの」という言葉には自分と他人とを分離する意識が含まれていない。「われわれ意識」というのは、共同利害関心をもち、かつ集団生活を送っているところであればどこにでも生じるが、その利害関心が地域社会に関するものである場合は、それが最もはっきりした形であられる。われわれの町、市、地方、そしてわれわれの民族が特にそうだが、それらが非難されたりおびやかされたりするとき、心の中にわきあがってくるのがこの感情である。民族の防衛のために私的犠牲がはられるのもしばしばである。しかしここでも、われわれ意識と利他主義との混同をさげねばならない。むしろこの場合は、個人的な利害関心がより大きな集団利害と同一化されるかないし吸収されてしまうのである。その結果、人はその集団と離れがたく結びついていると感じる。すなわち彼にとってのコミュニティは、「彼の家であり、彼の血をわけあった同族 (home of his home and flesh of his flesh)」なのである。
役割意識	位置ないし持ち場の感情である。すなわち各人は、相互交換のおこなわれる社会的場面ではたすべき役割つまり自己のはたすべき機能があることを感じている。個人にとっては全体への従属を意味するこの意識は、日常生活の規律の中にある習慣やしつけによって形成される。以上のようにして社会化された個人にとっては、役割意識がコミュニティ全体の中の一員であることを正しくさとる手だてとなるのである。他集団 (たとえば階級、人種) への愛着は、より広範なコミュニティへの地域感情としばしば対立し、また時にはそれに統合されたりすることがある。
依存意識	生活の必要条件であり、役割意識と密接に結びついている。それには物への依存が含まれているが、それは人々の物的願望がコミュニティによって充足されるからである。また同時に心理的依存も含まれている。つまりコミュニティは人々を扶養する大「家族」であり、生活にかなうすべてではなくとも身近なものはことごとく包含しているのである。現代生活においては個人の孤立ともなう孤独や恐怖が顕著となっているが、コミュニティはそれらからの避難場所となる。

(マッキーヴァー、C・H・ページ 1973) の内容をもとに筆者作成

欧米のコミュニティの構成員は人間だけであり、「われわれ意識」の中に含まれるのは人間だけである。よって自然は支配の対象となる。『コミュニティ』の中で「自然に対するもっと完全な支配力が要求される」(2011: 442)と述べられているのは象徴的である。それに対し、日本の伝統的なコミュニティでは、自然や死者も「われわれ意識」のなかに含まれており⁽³⁾、「離れがたく結びついていると感じる」(表1)。こうしたことから、マッキーヴァーがとらえているのは、当然欧米的なコミュニティであるということがうかがえる。

3. 顕在関心と潜在関心

「関心」と「コミュニティ感情」の関係については、大道安次郎による次のような解釈がある。「複合的共同関心を意志の側面に即するといえるならば、コミュニティ感情(原文ママ:筆者注)は情緒の側面に即する」(大道1959: 28)。筆者も大方この解釈に同意するが、試みとして、これらの関係を次のようにとらえ直した。

関心には、「顕在関心」と「潜在関心」が存在する。マッキーヴァーが『コミュニティ』で重視した関心は、明瞭な意志として表出した状態の関心である「顕在関心」である。一方で、関心には直観的・情緒的な側面があり、明瞭に表出しないが潜在的に存在するこのような関心を、筆者は「潜在関心」と呼びたい。

これらは別々のものというよりは状態の違いである。たとえば、特に成人の場合、一般に家族への関心はその親しさゆえに日常生活の中では表出することが少なく、他の利害関心に封じ込められるような形で、「潜在関心」として存在する。ところが、有事の際には家族への関心は一気に「顕在関心」として表出し、個人の利害を超えて最優先事項となる。

別の言い方をすれば、「顕在関心」は知性の領域に属し、「潜在関心」は直観の領域に属する。ベルクソンが指摘するように、「人類では直観はほぼ完全に知性の犠牲になっている」のであるが、「命がけの関心のはたらいているところでは直観は勢いをもりかえす」のである(1979: 315-316、原著初版1907年)。マッキーヴァーが後年提唱した「コミュニティ感情」は、この「潜在関心」に由来するものであると考えられる。

「顕在関心」はアソシエーションの必要条件であり、「潜在関心」はコミュニティの必要条件である。もちろん実際には、両方の関心はさまざまな程度の差を持ちながら相互浸透している。ここでは詳しく論じないが、テンニエスが『ゲメインシャフトとゲゼルシャフト』(原著初版1887年)の中で提示した「本質意志と選択意志」⁽⁴⁾との類似性も指摘されよう。

マッキーヴァーが『コミュニティ』において「顕在関心」を重視したのは、自身のコミュニティ論を、客観的かつ明瞭な理論として完成させたかったからかもしれない。そのために、不明瞭さを含んでいる「潜在関心」の部分を重視することに慎重であったと推察される。彼の念頭にあったのが「人間だけを成員とするコミュニティ」であったならば、知性の領域である「顕在関心」だけでかなりの部分が説明可能となる。一方で自然や死者を含むようなコミュニティでは、それらの存在を感受するような直観

の領域である「潜在関心」がより重視されていく。だが結局、彼はコミュニティの本質に迫ったとき、「潜在関心」の要素を「コミュニティ感情」という形で補わざるをえなかったのではなかったか。コミュニティは「程度の問題」(マッキーヴァー 2011 : 52) であり、日本のコミュニティの特徴を欧米のコミュニティが全く持たないわけではないし、人間同士の関係の中だけでも、潜在関心は少なからぬ影響を及ぼしているのである。

しかしそれ以上に、マッキーヴァーが「顕在関心」を重視した本質的な理由は、彼がコミュニティを「進歩のプロセス」とともにとらえていたことに求められるように思う。彼は次のように述べている。

コミュニティの漠然とした起源から、原始氏族、部族、ホルドを通り、……共同体的村落を抜け、対立的な都市共同体と不格好に統合された帝国を通過し、封建期の混乱を抜けて、近代西欧国家の緊密に結合している社会生活に至るまでのコミュニティの成長を跡づけることは、間接的な、曖昧な、形の整わぬ、しかし勝利へ通じる過程を辿ることになるのである (2011 : 380)

マッキーヴァーにとっての「コミュニティの成長」とは、中久郎も指摘しているように、人々のより多くの関心、より高度な関心を、無数のアソシエーションを創造することで満たし、共同生活をより豊かにすることであった (マッキーヴァー 2011 : 50、強調筆者)。アソシエーションは、知性の領域に属する顕在関心によって形成される。そうであるならば、コミュニティの成長にも、顕在関心の働きが重視されるというわけである。このことは、彼が「近代西欧国家」をコミュニティの成長の結果と見ていることとも合致する。

こうして彼は、近代化とともに進展する分業化や機械の導入さえも、人間の労働を貧しくするものというよりは、より個人を解放し、パーソナリティやコミュニティを豊かにするものとしてとらえた。だが改めて述べるまでもなく、近代化の歴史はコミュニティの解体の歴史として実現した。

次章からは、ここまで検討してきた「関心」という概念を、「顕在関心」と「潜在関心」を含んだものとしてとらえ、時間的な視点で分析する。そのことを通して、近代化とコミュニティの関係について考察したい。

4. 過去との連続性を志向するコミュニティ

先にもふれたように、マッキーヴァーは、「コミュニティはたえず相互に関係し合う心の活動によって創られる」(2011 : 123) と考えた。このプロセスの中で育まれるのが、成員同士の多様な「相互関心」とその連帯であり、マッキーヴァーが後に述べた「コミュニティ感情」であろう。筆者はこれを「潜在関心」に由来すると述べた。なぜなら、コミュニティにおける多様な関心は、時間とともに成員の心に「潜在関心」として蓄積し、その蓄積されたものから生まれてくるのが「コミュニティ感情」だと考

えられるからである。

コミュニティの歴史もまた、成員の「潜在関心」として蓄積され、成員同士の関係性に影響を与えている。伝統的な行事や祭りは、直観の領域に属する「潜在関心」を顕在化し、コミュニティの結束を強化する働きを持つ。祭りがときに生と死を模倣し、命がけの危険なものとして行われることがあるのは、「命がけの関心のはたらいしているところでは直観は勢いをもりかえす」(ベルクソン 1979 : 316) ことと無関係ではない。デュルケムが論じた「集合沸騰」⁽⁵⁾ を、こうした視点から補足することもできるだろう。

このように、歴史的な関心の蓄積がコミュニティをコミュニティたらしめている以上、そこでは「過去関心」⁽⁶⁾ が重視される。このような世界では伝統的なものに関心が向かい、過去が繰り返されるかのような「円環の時間」がイメージされる。つまりコミュニティは本質的に過去との連続性を志向し、現在の関係する世界の中でそれを再現する。この感覚は現代を生きる私たちには理解しづらいかもかもしれない。しかし真木が、ケニアのカムバ族出身のムビディの言葉として紹介しているように、たとえばアフリカ人の伝統的な観念によれば、たしかに「事実上未来が存在しない」のである。それは「明日や今年の秋という未来一般ではなくて、とおい未来に向けられる時間の意識が」存在しなかったということである(真木 2011 : 28-33、初版 1981 年)。後に改めて述べるが、程度の差こそあれ、未来を重視しない精神はかつての日本にも存在していた。

一方でアソシエーションは合目的組織であり、「目的の実現」という意味では「未来関心」を重視する組織体である。しかしながら、過去との連続性を志向するコミュニティから生まれたアソシエーションは、やはり本質的には過去との連続性を志向するはずである。なぜなら、そのアソシエーションの目的が「ある問題を解決する」という近い未来にあったとしても、結果として、そのコミュニティに存在する共同関心の方向性が、その目的に反映されなければならないからである。

ところが現代におけるアソシエーションの多くは、明確に未来のみを志向している。それは、アソシエーションの成員が共有する、個々人の「未来関心」に由来する。このような変化を生み出したものは何か。それこそが、個人としてのよりよい未来を志向するようになった人々の、時間意識の変化であった。

5. 時間意識の変化とコミュニティの解体

社会の近代化とともに、あらゆるものは計量可能な数値化の対象となり、時間の概念もまた均質化されていった。だがそれは、日本においてはそれほど昔のことではない。たとえば、人々は明治 5 年まで「不定時法」のもとで生活していた。不定時法とは、「昼間の時間と夜間の時間をそれぞれ等分して時間を計測する方法」であり、ここでは季節により時間の長さが変化する。それに対し、「一日の時間を一様に等分した」ものが「定時法」である(橋本 2006 : 4、初版 2001 年)。

西洋での定時法の普及は早く、機械時計が普及する 15 世紀にまでさかのぼる。このような「不定時法」から「定時法」への変化、つまり均一な時間への変化を必要と

したのは、橋本が指摘するように「商人や手工業者など都市の市民階級の人々」(橋本 2006:5)であり、資本主義や市民社会との親和性を物語る。こうして時間は正確に計算できるものとされ、資本主義社会の発展とともに「時は金なり」の精神が広まってゆく。それが次第に地方のコミュニティにも及んでいったことは歴史の示すとおりである。

しかし、均一な時間の広がりとともに punctual (時間厳守) な精神が浸透する以前には、それぞれのコミュニティの中に「われわれ時間」とも言えるような多様な時間が存在していた。これについて西本は次のように述べる。

punctual とは「点の」がその根本的な意味である。……逆に言えば、punctuality を求めることのない社会では、人は時間のゆるやかな「帯」の中で活動すれば事足りた。その「帯」の幅がどれほどであるかは、それぞれの社会や時代、また事柄の性質に依るだろう。共同体ごとに、活動の種類によって暗黙のうちに了解された時間の幅があった。時間厳守を求める社会、時間の規律が厳しい社会とは、その「帯」の幅が次第に狭くなり終には「点」へと移っていく社会である (西本 2006:158)

「点の時間」は、先に述べたような定時法を前提とし、可能なかぎり世界を普遍的に覆い尽くそうとする。地域ごとの自然、文化、歴史などを含んだ人々の営みは極めて多様であるにもかかわらず、「点の時間」はそれらにたいして無関心であり、かつ絶対的なものとして存在する。西本が述べたように、同じ地域の中でも事柄次第で時間のとらえられかたは変化するが、「点の時間」はそれらに配慮することがない。鉄道の正確な運行を例に挙げるまでもなく、現代における都市の時間は、このような「点の時間」として存在している。

一方で「帯の時間」は、その地域の営みとともにあり、そのコミュニティで共有されている関心によって創造され、相対的なものとして存在する。そこで生活する人々や自然との関係の中で、それらに配慮するような時間が現われてくる。たとえば日本の伝統的な農村では、「話も十分にできないような田植方法は喜ばれなかった」という (宮本 2012:123、初版 1960 年)。

このような「帯の時間」が描かれたものとして、渡辺京二の著書『逝きし世の面影』がある。彼は、幕末から明治にかけて日本を訪れた外国人による文献をまとめ、かつての日本人の姿を外国人からの視点によって浮き彫りにした。その中には次のようなものがある。

オールコックが「東洋では時間はけっして高価なものではない」と言い、「まったく日本人は、一般に生活とか労働をたいへんのんきに考えているらしく、なにか珍しいものを見るためには、たちどころに大群衆が集まってくる」と書いている (渡辺 2009:236、初版 1998 年)

ここに見られるのは強烈な「現在関心」である。渡辺は膨大な数のこうした文献を紹介しながら、日本における労働の時間意識の変化について次のように述べた。

近代工業の確立とともに軍隊的な労働規律として結晶するような、厳密に計測化された時間とひきかえの賃労働は、徳川期の日本にあってはいまだ知られざる観念だった。ひとは働かねばならぬときは自主的に働き、油をうりたいときはこれまた自主的に油を売ったのである（渡辺 2009：238）

明治以降の日本の歴史は、「帯の時間」から「点の時間」へと、急速な移行を果たしていく歴史でもあったと言える。人々の営みの中で共有された「帯の時間」の短縮は、無関心を基盤とする「個人の時間」への変遷を意味する。都市において均一化され計量可能となった時間は、未来を知性によって管理できるかのように見せ、人々の意識を「未来関心」へと導いた。このような精神のもとでは、「現在」は未来の手段となり、「過去」は繰り返されるものではなく、克服され乗り越えられるものとして存在する。

そうした流れの中で、「アソシエーション」もまた明確な未来を志向するようになる。人々は「未来関心」を焦点とした「直線的な時間」の中で生活し、知性の領域に属する「顕在関心」が重視されるようになってゆく。それまでコミュニティの歴史を蓄積してきた「潜在関心」は、そうと気づかれぬままに失われ、「コミュニティ感情」が育まれる条件もまた消失していった。コミュニティの解体はこのようなプロセスを含みながら進展していったと言えるだろう。

6. おわりに

本論文では、マッキーヴァーの関心論をきっかけに、コミュニティにおける「関心」と「時間」の関係について考察し、近代化とコミュニティの解体のプロセスについて論じた。ここから明らかになったのは、コミュニティにおける人々の関心は、空間的なつながりだけでなく、時間的なつながりの契機でもあるということである。空間的なつながりは「潜在関心」として蓄積し、過去との連続性を志向する時間的なつながりの中で「コミュニティ感情」を醸成する。人々の関心を契機とする縦と横のつながりは、さまざまな形で相互に影響し合い、共有された時空としてのコミュニティを存在させている。

しかし人々の意識が、共有された「過去関心」や「現在関心」から、個人的な「未来関心」へと推移していくにつれて、コミュニティは解体への歩みを早めていったように見える。この背景に、時間の均一化があったことは先に述べたとおりである。この時間の均一化が、労働を時間量によって計量可能なものとし、貨幣と交換される無機質なものと変化させていったこともつけ加えておくべきであろう。

未来の宿命ともいえるべき「不確実性」への対応が、コミュニティの関係性の維持そのものであった時代には、労働の手段と目的はひとつのものでありえた。しかし人々が個人として生きる現代では、未来の「不確実性」への対応は、ひたすら「貨幣の獲得」という手段で行われる。その末路は、「あらゆる未来関心の貨幣への収斂」ではないだろうか。

近代化にともなう「未来関心」の重視については、これまで多くの人たちが言及

し、警告を発してきた。真木は、「未来関心の基盤としての、共同体解体＝過去の解体」(2011:93) という関係性を明言したし、ショウベンハウエルは、人間が「到着点或いは結果のみに関心し」、その知性ゆえに「現在への全面的没入」ができない皮肉を語った(2008、原著初版 1851 年、『余録と補遺』に収録)。ベルクソンは、「計画とは仕事にあてがわれた目標である。それは未来を形にえがきながら未来を閉じる」(1979:135) と述べ、生命本来の可能性と創造性の喪失を指摘した。そしてマッキーヴァーも、人間からいまを奪うものとしての「未来関心」を憂いた一人であった。彼は『幸福の追求』(原著初版 1955) の中で、次のような言葉を残している。「わたしたちは、歳月の方をつかまえると、この瞬間の方を見失ってしまう。未来のために生きると、生きている現在を見失ってしまう」(1967:12)。彼はこのほかにも、時間に関して多くの言葉を残している。「心の時間は、時計の時間ではない。時計の針は、非人情にいつも同じ動作で……わたしたちはその奴隷となってしまう」「生活の刺戟と喜びを感じている時、生活の瞬間、瞬間に生命が、充実している時、もはや、時間はわたしたちの外側にはない。生きることと時間とが一つになり、わたしたちは、本当に時間を生きているので、時間に対する恐怖で悩まされることは少ない」(1967:10-14)。そうして彼は、時間を本当の意味で生きられる条件は、「時間がわたしたちの心を奪い去ることだ」(1967:16) と述べた。ここには西田幾多郎の「主客未分」⁽⁷⁾、フランクルの「自己超越」⁽⁸⁾に通じる思想が見られる。このとき、マッキーヴァーのイメージの中には、人々の多様な相互関心によって時間が紡がれる、理想的なコミュニティの姿が描かれていたに違いない。

■ 註

- (1) 杉原学「自殺予防における『地域の“つながり”の再構築』が果たす役割」立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科修士論文 (2011)。
- (2) 「多数の人がみな、みんなのただひとつの包括的な関心である、いわば町とか国とか家族とかの福祉、名声、またはみんなが関係している企業の成功を得ようとするときには、その関心をわれわれは〈共同〉関心と呼んでよい」(マッキーヴァー 2011:128)。
- (3) 柳田國男「先祖の話」(1945)「魂の行くえ」(1949)を参照。(柳田 2006)に収録。
- (4) 「2 種類の間人結合としてのゲマインシャフトとゲゼルシャフトの根底に働いているものとしてテンニエスが設定した人間意志の二つの類型」(盛岡 1993:1363)。
- (5) 「宗教的祭儀などの場で、人々が密集しあうことに伴って生じる激しい集団的興奮状態。デュルケムによると、そうした集団的熱狂、高揚の状態のなかで人々は、俗なる日常的現実、俗なる自己を離れて、集団と一体化し、集団(社会)やその理想、すなわち聖なるものの実在感やそれが有している道徳的權威を強烈な印象のもとに体験ないし再確認するとされる」(盛岡 1993:638)。
- (6) 本論文では、「過去への関心」「未来への関心」「現在への関心」を、それぞれ「過去関心」「未来関心」「現在関心」としている。
- (7) 「存在を知的・对象的に認識するというのではなく、存在と人間とが分かれる以前の非知的・非对象的な合一」(山田 2009:229)。
- (8) 「人間存在はつねに自己自身を超えて、もはや自己自身ではないなにかへ、つまり、ある事またはある者へ、人間が充たすべき意味あるいは出会うべき他の人間存在へ、差し向けられているという事態」(フランク 2011:266)。

■ 参考文献・資料

- R.M. マッキーヴァー、C.H. ページ著、若林敬子、武内清訳「コミュニティと地域社会感情」
 (“Society” *An Introductory Analysis*. 1949、8-11 頁、291-296 頁より訳出)『現代のエスプ
 リ』No.68、至文堂 (1973) 22-30 頁に収録。
- R.M. マッキーヴァー著、中久郎、松本通晴監訳『コミュニティ』ミネルヴァ書房 (2011、原著
 初版 1917)
- R.M. マッキーヴァー著、吉野三郎訳『幸福の追求』社会思想社 (1967、原著初版 1955)
- V.E. フランクル著、山田邦男監訳、岡本哲雄、雨宮徹、今井伸和訳『人間とは何か』春秋社
 (2011、原著 1957 [邦訳『死と愛』)、以後改稿を続け本書が最終版)
- 大道安次郎『マッキーヴァー』有斐閣 (1959)
- ショウペンハウエル著、斎藤信治訳『自殺について他四篇』岩波書店 (2008、原著初出 1851)
- 杉原学『自殺予防における「地域の“つながり”」の再構築』が果たす役割』立教大学大学院 21
 世紀社会デザイン研究科修士論文 (2011)
- テンニエス著、杉之原寿一訳『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』(上)(下) 2 冊、岩波書店
 (1994、原著初版 1887)
- 西本郁子「子どもに時間厳守を教える小学校の内と外」橋本毅彦、栗山茂久編著『遅刻の誕生』
 三元社 (2006、初版 2001)
- 橋本毅彦「序文」橋本毅彦、栗山茂久編著『遅刻の誕生』三元社 (2006、初版 2001)
- ベルクソン著、真方敬道訳『創造的進化』岩波書店 (1979、原著初版 1907)
- 真木悠介『時間の比較社会学』岩波書店 (2011、初版 1981)
- 宮本常一『忘れられた日本人』岩波書店 (2012、初版 1960)
- 盛岡清美、塩原勉、本間康平編『新社会学辞典』有斐閣 (1993)
- 柳田國男『柳田國男全集 13』筑摩書房 (2006、初版 1990)
- 山田邦男『フランクル人生論』PHP 研究所 (2009)
- 渡辺京二『逝きし世の面影』平凡社 (2009、初版 1998)